
魔女の唄

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の唄

【Nコード】

N0750H

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

大量破壊兵器、それは持とうと思ったからといって持てるものではなく、持ったからといって幸福になれるものでもない。

（前書き）

歌や音楽は、人の発明品の中でも、最も素晴らしいものの一つだと思います。

ほぼ半分に欠けた月が、高い空から周囲を照らしている。

冷たくも暖かくもない風が通り過ぎ、砂塵を巻き上げて連れ去る。視界に浮かび上がる輪郭はどこまでも角張っていて、固く無機的な風景を構築している。

鮮やかと呼べる深紅のローブに身を包んだ女性が、両腕を抱き締めるように身を縮こまらせた。しかし、決して寒いワケではない。降るほどに広がる満天の星を眺めて吐いた溜め息が、白く濁ることはなかった。

しかしそれでも、むしろだからこそ、彼女には寒く感じられた。種時きの時期も過ぎ、季節は花から青葉へと移りつつある。しかしここには、花も青葉も皆無と言えるほどしか存在していない。乾燥と寒暖の差を乗り越えられる小さな植物が、地面に這いつくばるようにして点在している程度だ。視界を覆うほとんどは、岩と土と砂ばかり。時折吹き抜けていく風に巻き上げられた砂塵を除いて、動くものすら見付けるのが難しいほどだった。

そんな土地に、彼女はもう百年近くも暮らし続けている。実りもなく、獲物すら乏しいここで生き続けることは、決して簡単なことではない。彼女がそれでも生活を成り立たせていられるのは、誇りとしている豊富な知識と幾ばくかの秘術、そして近隣の村から時折届けられるお礼の品々があるからだ。実際、今日の午後にも調査した薬の礼として、小麦粉や干し肉の蓄えを分けてもった。

人の優しさには、感謝しても感謝しきれるものではない。

だからこそ、彼女は唄う。月と星の光が降り注ぐ晩に、悲しげに鳴いている風に乗せて、自らの想いと願いを届けるために。

彼女は西の魔女、この不毛な土地が広がる辺境から、この国と人々を見守る偉大な傍観者である。だが、この不毛な大地を故郷として愛して止まない彼女にも、見る夢はある。

ここが、色とりどりの花や深い緑色の葉を繁らせる木々に覆われ、人々の歓喜によって満ち溢れる、そんな日が訪れることを。

魔女はフードを背中へ下ろし、涼しげな輝きを平等に大地へと降り注ぐ白い月を見上げると、いつものように一つ大きく深呼吸をしてから、改めて乾いた辺境の風を肺に吸い込んだ。

紡ぎだされる言葉が声となり、唄となって暖かな闇に広がっていく。穏やかな旋律が、気圧変化によって生じたに過ぎない自然現象を心ある運び屋へと変じていく。

魔女の抱く、小さな想いや願いと共に。

唄が聞こえる。

最も辺境にあるこの村は、魔女の屋敷に近いということでも有名であった。年に何度か訪れる、魔女に仕事を依頼しようという人物が最後の一晚を過ごす地としても知られていた。だから、風の吹く月夜に聞こえる魔女の唄は、彼らにとって当たり前の出来事であり、退屈な毎日を彩る微妙な香辛料でもあった。

特に、それが決まって同じ時刻に唄われることを彼らはよく知っていた。

「あら、もうこんな時間？」

翌朝の仕込を終えた母親が、エプロンで手を拭いながら振り返る。

「アナタ、もうそろそろ出た方がいいんじゃないの？」

「ん？ ああ、そうか。今日は見張り番だったな」

すっかり忘れていたのか、欠伸をしながら面倒臭そうな素振りで立ち上がる。

「えー、もう終わり？」

「まだ最後まで読んでないー」

本を読んでもらっていた兄と妹が抗議の声を上げる。

「二人はもう寝る時間でしょう。ホラ、さっさと着替えてベッドに入りなさい」

「まだ眠くないよ」

という兄の言葉に、母親がニヤリと口の端を吊り上げる。

「そんなことを言っていると、魔女にさらわれて苦い薬の材料にされちゃうよ。いいのかい？」

「そんなの嘘だよ」

「おや、お兄ちゃんは聞こえないの？ 魔女の唄が」

母親に言われて耳を澄ますと、風に乗って悲鳴にも似た唄声が幼い兄妹の耳にも届く。これまで、出稼ぎに出ていた父親の分も働くと朝早くから起き出していたために、魔女の唄が聞こえるほど夜更かしをしたことはなかったのだ。友人を通じて話だけは聞いていたが、それはまさしく地獄の底から手招きでもされているかのような、悲しげで恐ろしい旋律であるように聞こえた。

「……お兄ちゃん、もう寝ようよ」

「こ、こんなちつとも怖くないって」

怯える妹に裾を掴まれて、逆に兄は強がりを見せる。

「魔女がどうして月夜の晩に唄っているのか、お兄ちゃんは知っている？」

「知らないけど……」

その表情を見る限り、知りたくもないようだ。むろん、だからこそ母親は教えにかかる。

「魔女はね、探しているの。自分の唄に耳を傾け、眠ることのない悪い子を。もし見付かったら、どこからともなく現れて、風に溶けるみたいにさらわれるんだって。そうになったら……」

「僕、もう寝るよ。おやすみっ！」

「あ、お兄ちゃん待ってよー」

二人は蒼白になって自室へ向かった。魔女の薬は、相変わらず抜群の効果である。

「おいおい、あんまり脅かすと逆に眠れなくなるんじゃないか？」

「コートを羽織り、身支度を整えた父親が呆れたように聞いてくる。『怖いくらいが丁度いいの。それより、コレを持って行って下さいな』」

そう言つて母親が差し出したのは、小さなバスケットだ。

「これは？」

「お夜食です。相方の人と一緒に食べて下さい」

「そうか。助かるよ」

「では、いつてらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

見送られて、玄関をくぐる。

途端に、荒野独特の乾いた風が彼を出迎えた。見上げれば、都会では味わえない月と星の乱舞が空を狭く見せている。そして何より、懐かしい調子の外れた唄が、耳に心地良く響いた。子供の頃は怖いとすら思つた旋律が、懐かしさもあつて暖かな調べにすら感じられる。慣れというのは、ある意味魔物よりも恐ろしい。

「どーも、こんばんはー」

星を見ながら歩き始めたところで、背後から声が掛かる。

「あ、これはどーも」

振り返つてみると、右手を上げて近付いてくるのは本日の相方だった。

「いやー、ずいぶん暖かくなりましたね」

そう口にする相方もコートを羽織つてはいるものの、手や首は露出している。

「そろそろコートもいらなくなりそうで。まあ、暖かいのは何よりでしょう」

「全くですよ。辺境の冬は厳しいですから」

この冬はよほど堪えたのだらう。相方の凍える素振りは堂に入っていた。

「そういえば、息子さんが寝込まれたとか聞いたんですが、大丈夫なんですか？」

バスケットを小脇に抱え直し、相方の横に並びつつ心配そうに尋ねる。

「ああ、もうすっかり治りましたよ。例の『西の魔女』様に貰った

薬が効きましてね。あれほど効く薬は、今までに見たことがありませんでした。さすがに魔女の名は伊達ではありませんな」

「そうですね。でも、お子さんは嫌がったでしょう？ アレは大人でも顔を背けたくなるほど苦いですから」

「そりやもう。あんまり嫌がるんでちよつと舐めてみて驚きましたよ。あれなら、効き目以前に病気を避けたくありませんな」

「なるほど、そう考えると、この村の人間が丈夫なのも納得です」

澄んだ夜空に、男達の笑い声が響く。

「それで今日の昼間、薬のお礼をしに魔女の屋敷に行ってきました。噂には聞いていましたが、思っていた以上に若い女性の姿をしていたので驚きましたよ」

「元氣そうでしたか？」

「ええ、正直言つて、あれで我々の何倍も生きているというのは、信じられませんでしたね。と、さすがにこれは失礼な発言でしたかね」

「いえ、初めて見た時は私もそう思いましたから」

婿入りして辺境に暮らすようになった相方のような人間からすれば、魔女の存在は奇異に映っても仕方のないことだろう。

「それにしても、あれだけの土地を遊ばせておくというのは、少々もったいない気がしますな。まあ、作物が育たないのであれば、いくら広くとも意味のない話ではありますが」

「こればかりは、魔女様自身の問題ですからね。我々には何ともしようがありません」

「誰がいませんかね。あの唄をやめさせようという猛者が」

「相当な命知らずでもなければ、無理な話でしょう」

「ですな。正直、新参者の私でも御免ですわ」

「まあ、畑を広げられないのは残念ですが、食べるのに困っているワケでもありませんからね。あまり欲をかくなという西の魔女のお達しなのかもしれません。それに、慣れてしまつと気にならなくなりますよ、この不協和音も」

むしろ無くなってしまうたら淋しさすら感じるのではないかと、男は思ってしまう。それほどに、月夜と乾いた風と魔女の唄は、繰り返されてきたことだった。

彼らは立ち止まり、しばし耳を傾ける。

唄が終わる、その時まで。

唄の終わりは、今日という日の終わりを意味する。

最後のフレーズを声と息の続く限り張り上げて、魔女は一日の終幕を締めくくった。全力を尽くしての熱唱は、いつもと変わらない充足感と歓喜を与えてくれる。何もなく、誰も居ない辺境の地で一人生きていく魔女にとって、この時間は生きていくために必要不可欠なものであるようにすら思えた。

「明日も唄えるといいな……」

しかし、人が生きていく上で必要なものが他の生き物の命であるように、魔女にとって必要なものも犠牲を伴っている。

「あら？」

フードを被り直す魔女の視界に、小さな命が映る。それは手の平に載るほどの小さな鼠であり、すでにぐったりとして動かなかった。「まあ、鼠がいるなんて珍しい」

ぐったりしている鼠を掬い上げるように持ち上げ、月明かりの元で姿の観察してみる。温もりこそあるものの、腹を突付いても尻尾を引っ張っても反応がなかった。この餌不足の辺境で、昼夜問わずに餌を探した結果、殺人音波の犠牲となってしまうたのだろう。憐れなことである。

ちなみに、殺人とか物騒な単語を並べてみたものの、殺すほどの力はなく、せいぜい気絶させる程度だ。魔女の手に載っている鼠も、気絶の真っ最中である。

「でも、ここまで辿り着くのが精一杯だったのね。無念でしょうけど、お墓を作ってあげるから安らかに天国へお逝きなさい」

貴重な鼠の命が、無残に散った。

「可哀想に。運がなかったのね」

運ではなく、貴方のせいです。

「あら？ あそこにも……」

わずかばかり右へと向けた視線の先に、今度は小鳥が落ちていた。

「あの子も、一緒に埋めて上げましょう」

また殺した。

「辺境の夜は残酷ね。こんな小さな生き物達ですら、生かしておけないなんて」

いえ、残酷なのは貴方です。

「やはり、この子達のためにも、少しは農作物を育てる必要があるのかもしれないわね。村の人が今度やってきたら、何かコツがないか聞いてみましょうか」

彼女とて、自給自足を全く試みなかったワケではない。ただ、その挑戦の全てが失敗に終わっているだけの話だ。

「それにしても、種が芽を出した次の日には全部枯れているというのは、一体どういう病気なのかしらね」

病気なのは作物ではなく、貴方です。

「ここに来て百年にもなるけど、木が一本も育たないというのは、あまりに過酷な環境よね。もう少し肥沃になれば、村人達も近くに移住してこられるのでしょうけど」

そうなれば、犠牲になる生き物の種類が増えるのは確実である。

というか、そもそも荒野が広がっているのは貴方のせいです。

「さて、お墓を作ったら今日はもう休みましょうか。作物のことは、また明日にでも考えることにしましょう」

月夜に佇む深紅のローブを羽織った魔女は、こうしていつも通りの穏やかな一日を終えた。数え切れないほど繰り返してきた日常だが、それでも飽きずに毎日を繰り返していられるのは、この辺境が不毛であると共に平和でもあるからだろう。

遙か西方より勢力を拡大してきた帝国が、魔女の唄を恐れて侵攻してこないのは、あまりに皮肉な現実である。

（後書き）

どんな発明品も、素晴らしいかどうかは時と場合によります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0750h/>

魔女の唄

2010年10月8日15時22分発行